

坂町道德作文
特選作品

帰り道に起こったこと

坂中学校1年
川瀬 蒼太

真夏の暑い日曜日、僕は部活が終わって友だちと帰っていた。ふと見ると、おじいさんが自転車で乗っていた。その時だった。おじいさんがふらついて道路側に自転車ごと倒れて、少しだけ車にぶつかってしまっただけ。それを見た僕と友だちは、慌てておじいさんの方へ走って行き、声をかけ、おじいさんと自転車を起こした。ぶつかった車に乗っておられた方も外に出てこられた。幸い、おじいさんに怪我はなかった。急

僕は、この出来事で学んだことが三つある。ひとつ目は、いつも周りを

見ていることだ。何が起ころうとも臨機応変に行動できるように周りを

見ることは大切だと思う。ふたつ目は、何事にも落ちついて行動することだ。例えば、自然災害など、いつ起ころうかわからない。僕が小学1年生の時、西日本

豪雨災害があった。大雨で道に土砂が流れていて、みんなが怖い思いをしている時にも、近所の方は、「落ちついて行動してね。」とおっしゃっていた。それ

のおかげで、大きな混乱もなく、なんとか災害を乗り越えてこられたのだと思う。そして、三つ目は、何に対しても準備しておくことだ。僕の学校の先生が、「準備八割。」

時でも、この「準備八割」を、忘れずに取り組んでいる。また、災害が起こった時でも、事前に避難ルートを確認しておいたり、避難用バックを用意しておいたり、いつ何が起ころうとも大丈夫なように、準備をしておくことの大切さを、改めて感じた。

前までは、自分でも何をしたらいいかわからず、おどおどしていた。しかし、このおじいさんを助けた出来事をきっかけに、自分はどうか、どのように行動したらいいかなどがわかってきた。

これからは、自分の身の回りで、実際に起きたことだけでなく、災害ボランティアや募金など、身近ではないこと、どんなに小さなことにも取り組んでいきたい。そして、最初は驚いてしまうこともあるだろうが、「怖い」とか「どうしよう」などの気持ちは捨てて、自分にできる最大限のことをすることが、一番大

切だと思ふ。

もしも、またこのようなことが起こったら、自分はどうのように行動したらいいのか、どうすればよいのかを考えられる人でありたい。そして、いつ、どこで、何が起ころうかわからないからこそ、周りをしっかりと見て、慌てずに、今、何をしたらいいかを判断していきたいとも思う。慌ててしまったら、また、何か悪いことにつながってしまったかもしれない。落ち着いて行動し、人のために行動できる大人になりたいと思う。



『一緒に頑張ろう』

という魔法の言葉

坂中学校2年
木村 結菜

『一緒に頑張ろう』は、相手をひとりにさせない

ための言葉だよ。」

と、母が言っていた。私の母は、銀行で働いている。そこで、新入社員の手引に当たり、約3ヶ月ほど交換日誌をしていた。新人の方が、毎日の報告や学んだ事を記入し、それに母がコメントを書くという作業だ。少し前に、母が、このコメントを書くときに心がけていることがあると聞いていた。それは、コメントの最後に『一緒に頑張ろう』という言葉を聞いたとき、「相手がひとりで悩まないための優しい言葉だな。」と思った。そして、どんなときも相手を思いやるかっこいい母らしい言葉だと思った。

それから少し経ったある日、新人だった人が、「木村さんの『一緒に頑張ろう』という言葉が、ずっと心の支えになっていました。」

と、母に言ったそうだ。母は、この言葉を聞いて、『ひとりではないよ。』と言ってきた。『ひとりではないよ。』と、うれしそうに話していた。私はこの話を聞いて少し驚いた。まさか、この言葉が相手の心に残り、支えになり続けていたと思っていなかったからだ。そのとき私は、母の言葉を聞き、『一緒に頑張ろう』という言葉は、相手を安心させることのできる魔法の言葉なの

だと思つた。母から新人に送った最高のプレゼントだ。母の言葉は、私の心にも深く刺さっていた。私は、多くのことをひとりで抱え込み、苦しくなってしまうことがあ

る。周りの頼ることができず、悩んでしまうのだ。母の言葉が、まるで私に向けた励ましのように感じた。「ひとりで頑張らないといけない」や「頼ってばかりはだめだ」と考えたときに「大丈夫だよ」と、私に、人に頼る勇気も与えてくれた。そのため、私に

とつても、母の言葉は、特別な言葉になった。それから、私は誰かに相談されたとき、必ず、『一緒に頑張ろう』という言葉を言うようにしている。私の友人は責任感が強く、何事にも一生懸命取り組む人だ。部活動が同じバスケットボール部で、プレーや精神面でもみんなに頼られている。彼女が私に相談するときに、よく私の良いところを話す。そのたびに、私は、「自分も頑張ろう」と思うと同時に、「彼女にだって、良いところがあるのにな」と思っていた。また、少し前に彼女と話したとき、「悩むのは当たり前だから、何でも頼ってね。」

と言ってくれた。いつも部活動のメンバーのことを思っている優しい友人らしいと思つた。けれど、ひとりで悩んでほしくないなとも思つた。何度相談されても、彼女は悩んでばかり

で、本当に力になれているのか不安だった。責任感の強いところは、彼女の良いところだが、ひとりで悩むのは、苦しくて辛いことだ

というのを、私は知っていた。だから、どうしてもひとりでではなく、一緒に悩みたいと思つていたので。そう考えるようになってからのこと、ある日、彼女から相談されたときに、私は、「みんなで一緒に頑張ろう！私たちにも頼ってね。」

と言つた。母が教えてくれた魔法の言葉だ。彼女にこの言葉が届いたかは分からないが、少しでも救いになればよいなと思う。そして、彼女に甘えてしまう私自身を切り替える力にした

い。相手を守るためや自分を強くするために『一緒に頑張ろう』は、必要な言葉であり、いつかは、私のように、その言葉に励まされる人が出てくるかもしれない。その人たちのためにも、私は、この言葉を忘れないでいたいと思う。

私は、母と新人の話聞いて、『一緒に頑張ろう』と、ひとりではないと思えることで、一体、どれだけ人は強くなれるのだろうと考えた。その魔法の言葉に、何人の人が救われてきたのだろう。

魔法の言葉は、母から新人の方に、そして、私へと伝わってきた。私はこれから会うたくさんの人にもこの言葉を伝えていきたいと思う。なぜなら、多くの人の支えになると思うからだ。頑張れと応援されるより、一緒に頑張ろうと励まされた方が強くなれる。頑張る勇気がもらえる。『一緒に頑張ろう』は、相手をひとりで悩ませないための魔法の言葉だと思ふ。だからこそ、私は、大切な人を救うために、魔法の言葉を使っていくべきだと思う。

発信

坂中学校3年
久保田 歩

「私たちは広島に生まれたい。だから、発信しなければいけない。それが使命だから。」

これは、学校に出前授業で書写を教えに来てくださった先生の言葉だ。先生は、広島県の原爆について、平和のメッセージを書き、伝える活動をされておられ、海外でも活動されておられるそうだ。

私は広島に生まれ、幼い頃から原爆についての学習をしてきた。「8月6日午前8時15分」毎年、この日に手を合わせ、哀悼の意を込めて黙祷を捧げる。毎年、平和学習を行っているため、これ以上、私が見られるものはないのではないかと、このまま、授業はスタートした。先生は6枚ほどの半紙に、力いっぱい文字を書いていかれた。

